

# 陶工の仕事

## 十五代 沈壽官



八月十六日から三日間、白薩摩の原料調査を行った。白薩摩原料と一口で言うが、石の様に固いものから簡単に手で掴めるものまで様々ある。当然それぞれの果たす役割も異なる。人の体に例えて骨や筋肉や脂肪といったものを想像して頂きたい。

踏査したのは開聞町、笠沙町、霧島硫黄谷、入来町などいずれも藩政時代より白薩摩原料の産出地としてその名を知られた土地である。しかしながら、この三十年間程、鹿児島県内いずれの陶器工房も土の入手を県外の陶磁器原料屋に発注するようになり、県内のそれら原料産地はもはやその存在すら忘れられている。県外発注の理由は省力化に加えて原料の

枯渇である。

その様な状況の中、今回私が改めて現地調査並びに鉾山主との交渉に入ったのは自前の陶土、しかも鹿児島産の原料のみで造り上げた陶土をやはりどうしても開発する必要があるからである。

三年前、フランス国立セーブル美術館で開催された「パリ薩摩焼展」に於いてフランス側から提起された「薩摩焼の定義とは？」との問いかけは私に大きな問題意識を与えた。従来は鹿児島県内で生産された焼物は大括りで薩摩焼と総称してきた。しかし、それでは伝統的工芸品も創作陶芸の同じカテゴリーに属してしまう。その分かりにくさが伝統産業としての白薩摩製造の衰退に拍車を掛けている事に気付いたのだ。

未来に一筋の光明を見出すには、どうすれば良いのか。その問いの答えは意匠や製造の

精度を増すだけでなく、焼物の原料そのものをよりローカルに仕上げていかなければならないという事であった。即ちローカルをより上質に磨き上げる事がオンリーワンである事に気付いた。

現実には山に入ってみると、三十年の歳月はあまりにも長く、鉱山の良質な部分は既に掘り尽され、更に製土に関する情報や人材もとうに失せていた。しかし、鉱山主の御好意により、完全に途絶えていたと思っていた製土への可能性がほんのわずかではあるが残されたのだ。それが、笠沙椎の木村の陶石と入来町のカオリナイトである。白薩摩焼の製造に不可欠なこの二大要素に可能性を見出した事は大変意義深く、今回の調査の大きな収穫であった。この細かい糸を大切に、大切に紡いでいかなければならない。

焼物は一に土、二に焼、三に細工と言われ

る。

面白いことに焼物の原料になる様々な土は必ず温泉の近くに産出するのだ。つまり、陶器原料となる土は、特定の岩石が火山による地熱の影響を数億年規模で受ける事により変成したものである。われわれはその中で純良なものを選び、砕き、水簸を繰り返しながら更に不純物を除去。そして、細かな粒子を沈殿させる。そうして作られた幾つかの異なった性質の微細な原料を配合し、製作に向いた陶土に仕上げていくのである。やがて陶土で作られた物達は一二〇〇℃の高温で固く焼き上げられる。

つまり、地球が数億年を掛けて火山という窯で石を土に変えてくれた。そして、陶工はその土を窯という火山に入れる事で、再び土を石に変えるのである。陶工の仕事はそういう事である。